

個性が光る！泥だんご作り実践 ～関わり続ける“モノとの対話”から学生が得るもの～



関西学院大学教育学部 教授 栗山誠

I. はじめに

デジタルによる環境や遊びが私たちの生活の一部となる中で、泥・土に触ることや小動物・昆虫と戯れることを好まない(またはその体験を覚えていない)という教員・保育者志望の学生を多く見かける。しかし自然物や小動物は子どもの成長過程において必要な環境であり、子どもたちはそれらに関わる中で、さまざまな発見や感情体験をし、遊びを生み出し、感性を磨いていく。そしてそこにいる大人(教師・保育者)が子どもの感性・言動に共感のまなざしを向けることで、子どもたちの成長や生活を豊かにしていくことができる。こうしたことを考えると、教員・保育者を目指す学生には、幼児期・学童期の子どもが感じることを、もう一度、自分自身の体験として新鮮な目で捉え直してほしいと願っている。

以上の思いから、筆者は、学生対象に、自然物に触れる体験授業として泥だんご作りを継続して実践してきた。そしてさらに造形教育という文脈では、泥だんご作りは‘モノとの対話’を感じることができる奥深い教材であると考えている。ものに関わる自分(身体)と、関わりの中で変化していく土(モノ)が一体となり、‘ある特別な時間’を過ごす体験は、子どもが造形活動で夢中になる体験を再確認することであると思われる。今回のレポートでは、学生が実際に泥に触れ、泥だんごを作る過程の中で何を感じたのかを、素材(土)の再認識、身体性の意識、イメージの発生という観点から記述してもらった感想を紹介する。



II. 泥だんご作りの実践の流れ

第1回目：学生は泥だんご作りに対して「幼稚」「面倒くさい」といった偏見が多い。そこで魅力のある導入として、光る泥だんごを紹介。(NHK 人間ドキュメント「光れ！泥だんご」2001年6月放送の録画ビデオ参考)。学生に「作ってみたい」動機を持たせると同時に、幼児が泥だんごを大事に作り続ける理由を探ってみようという目的を共有する。

第2回目：野外実践。はじめは泥に触ることに戸惑う学生が多いが、徐々に熱中していく姿が見られる。

1時間でほとんどの学生が手のひらサイズのずっしりとしただんごを作ることができる。

第3回目：袋に入れて寝かせただんごにサラ砂をかけ、布で磨いたり、色粉をつけたりして仕上げる。

この段階で愛着のある自分の泥団子ができるので、最後にその泥団子を風景の一部として飾り写真を撮り、相互鑑賞をする。後日感想レポートを提出する。

② 形成段階の葛藤と変化：「気持ち悪い」から「気持ちいい」へ。「どこにでもある土」から「自分のもの(分身)」へ。「どうでもいい」から「きれいな丸になってほしい」へ。割れると「悲しい」へ、気持ちが変わっている。



① 磨き段階の葛藤と変化：作る過程の状況に応じて適した土を探索することに夢中。小石の混入に困惑。光らせるために磨く力加減の調整。大切なものを育てる喜び、壊れる悲しみ。変化していく楽しみ。



③ 個性を探る：割れたかけらやデコボコは、他にない個性的な形となった。ヒビの模様はだんごの個性となる。欠けた箇所やヒビに色粉を入れて、自分らしく飾った。



④ 土の変化と自分の変化を記入したレポート

泥団子見かけ、 質感の変化 (イラスト)									
自分の変化、 (気持ち、行動 変化など)	お水が少なくて 花を手に取るが、 土をこぼすのが 苦手で、	水が少なくて 土をこぼすのが 苦手で、	水が少なくて 土をこぼすのが 苦手で、	水が少なくて 土をこぼすのが 苦手で、	水が少なくて 土をこぼすのが 苦手で、	水が少なくて 土をこぼすのが 苦手で、	水が少なくて 土をこぼすのが 苦手で、	水が少なくて 土をこぼすのが 苦手で、	水が少なくて 土をこぼすのが 苦手で、

泥団子見かけ、 質感の変化 (イラスト)						
自分の変化、 (気持ち、行動 変化など)	水分が少なくて かた、乾かした お水を足した お水が少なくて かた、乾かした お水を足した	水分が少なくて かた、乾かした お水を足した お水が少なくて かた、乾かした お水を足した	水分が少なくて かた、乾かした お水を足した お水が少なくて かた、乾かした お水を足した	水分が少なくて かた、乾かした お水を足した お水が少なくて かた、乾かした お水を足した	水分が少なくて かた、乾かした お水を足した お水が少なくて かた、乾かした お水を足した	水分が少なくて かた、乾かした お水を足した お水が少なくて かた、乾かした お水を足した

Ⅲ. 体験感想レポートの分析

⑤ 泥だんごの個性を生かして飾る

泥・土という環境に、身体感覚（触覚・視覚・嗅覚など）をフルに使って関わった一連の活動を終えて、学生は様々な思いを感想レポートの中で語ってくれた。特に、レポート項目として「土が変化していく様子」と、その時の自分の「感情や感覚、行動変化」を関連させて意識できるよう記述してもらった。その中で、学生にとって泥だんご作りはどういう意味があったのか、またこの体験は学生にどんな影響をもたらしたのかを次の6つの観点にまとめて紹介する。

a) 「土・泥」そのものへの驚き、だんごを作る過程での土の変化や性質への気づきがみられた。

感想例：土のおいが新鮮だった。／空気を入れないようにとても強く握った。水を含ませると土がぎゅっと固まってきてしっかりしてきた。／普段は土なんて気にしないのにいい土を探すのに必死だった。／握って丸めて同じことのくり返しなのに、だんごが変化していく姿が不思議だった。／手を動かすと土がすぐに応えてくれた。

b) 身体感覚をフルに使った活動の中で、リラックスでき、ストレスを解消できた。

感想例：いい土を探す作業、サラ砂を探す作業、丸くする作業、ヒビを直す作業、磨く作業…それらに熱中するのは心地よかった。友達との会話も自然と弾んだ。快い時間が流れた。泥だんごが与えてくれている時間なのだ。うまくできる、できないは問題ではない。その作っている過程こそが目的なのだと実感した。

c) 子どもが泥だんご作りに夢中になり、大切にしている気持ちがわかった。愛着がわいた。

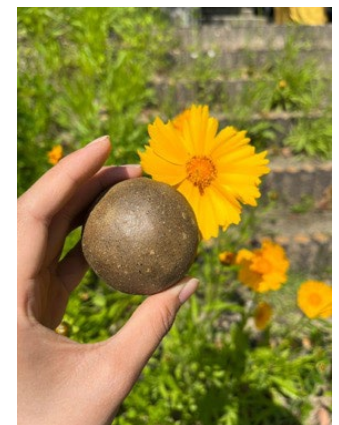
感想例：手の中ですころころ転がっている泥だんごを見つめているととてもかわいく思えてきた。まるで自分の分身みたいに愛おしく思えてきた。ひびが入ったときは心配でどうしようかとおろおろした。／自分の泥だんごはすごく大切に一番輝いて見えた。／だんごがだんだんと変化していく姿を見ると飽きる事がなかった。／自分が一生懸命作った泥だんごはとっても大切なものになった。／作る過程で、楽しさ、不安、緊張、達成感など心が揺れ動く経験ができた。

d) 子どもの頃の思い出がよみがえった。

感想例：土がこんなに冷たくて気持ちのいいものだということ久しぶりに思い出した。／小さい頃も自分の作った泥団子を家に持って帰って大事に飾っていたことを思い出した。／すっかり忘れていたと思ったが、実際土に触ると子どもの頃色々工夫し、研究しながら団子を作ったことが蘇ってきた。

e) 子どもにとって泥だんご作りはどういう意味があるのかを自分なりに考えた。

感想例：何かに熱中するのは楽しくて達成感があるなと思った。／子どもの想像力や集中力を豊かにしてくれると思った。／この経験を活かして子どもが物を大切にする心などをわかってあげたいと思う。／楽しいだけでなく頭を使ったり、手を動かしたり、体を使ったので、泥だんごはとってもいい経験だと思う。／宝物を持つ喜びはとても心に大きなものを与えます。／だんご作りは癒されると同時に、集中して一つのことに打ち込む力が育つのではないかと思っ



た。／自分の体の動かし方を意識し、自分の動きが与える影響にも気づくことができた。

f) 泥だんご作りの活動を通しての自分への気づき、心の変化があった。

感想例：／土を丸めただけなのに大事に扱っている自分に少し驚いた。／イライラした気持ちがいつの間にとれて、リラックスしていた。／友達を許してあげようと思った。／最初は他の人のようにきれいにだんごにならなかったけれど、だんだん満足いくものができて嬉しい。何事もやってみなければ始まらないし、自分もがんばったらできるということを感じた。／友達の泥だんごを見て、みんな同じ丸だけどなぜか個性があると感じた。／このままでいいと思えてきた。

IV. まとめ

二十歳前後の学生の時代に敢えて、泥・土に触るという体験はどういう意味があるだろうか。また、子どもが大好きな泥だんご作りは、学生の心にどのような影響を及ぼすのだろうか。そうした問いを持ちながら、実践を行なってきた。私たち人間は年齢を重ねるにつれて、日々の生活に起こる様々な出来事や環境が当たり前の世界となっていく。本来私たちの生活の土台に「土」があり、その恩恵を受けながら生活をしていることも既に、当たり前と思い忘れていく。しかし、生まれて数年の幼児は、この土に敏感に関わり成長を続ける。あそびの中で泥・土に、自分の身体や思いをぶつけ、発見、試行錯誤を繰り返す。時には心が癒されたり、時には自己実現の場にもなっている。また土は動植物や昆虫の命が育つ場所であることを知る。だんごを作る過程で多くの学生が子どもの感性に迫ることができ、さらに教育者としての視点も持つことができたのではないかと思われる。そして、今回の泥に関わり続ける特別な時間の中で、多くの学生は土・泥と対話する自分を意識することができた。そこでは土の表情の変化と共に、自己の感覚や感情が変化していき、子ども・自分・自然をめぐる想いが湧き上がり、何か新たな気づきに出会う経験ができたと思われる。

参考文献

加用文男『光る泥だんご』ひとなる書房, 2001
加用文男『光れ！泥だんご』講談社, 2001

